詩人である事に
誇りを持とう
ヤマダヒフミ

詩人である事に誇りを持とう

詩人である事に誇りを持とう

皆に詩人(笑)と馬鹿にされている事に

世の中に全然必要とされていない事に

理系の奴に笑われて、同窓会の時に

恥ずかしい思いをする　そんな僕達に

そんな風に詩人であるという事に

僕達は絶大な誇りを持とう

親や教師や上司や友人から嫌われ気味で

彼女から「もっと稼げよ」と文句言われている僕ら

あるいは、そんな人間関係が全然存在しない僕ら

そんな僕ら・・・詩人は自分達が詩人である事に

とても素敵な誇りを持とうではないか

何故って、僕らは神の寵愛を受けているから

誰にも見える事のない、神の光を受けてキラキラと輝く

あの六月の朝を直視する事ができるのだから

他人を愛せる時

もし、僕以外の全ての人間が死んでしまったら

僕はその瞬間、とてもせいせいするだろう

そしてこの地球も一人の邪魔者を除いて

余計な連中が消えた事を神に感謝するかもしれない

・・・だが、僕はその後すぐに

本格的に後悔し始めるだろう

そして、その時になって　僕は始めて

他人を愛せるだろう

自分以外の人間が全て消えたその時になって

詩を書く事

もう何も書く事はない

もう何も伝える事はない

ただ、僕は一つの沈黙としてそこに存在しているだけ

そう考えて、僕はキーボードに触れなくなった

・・・にも関わらず、僕の中の言葉は一つの表現を求めて

僕の中から外に出ようとする

すると、僕はその圧力に耐えかねて

再びまたこうして、キーボードに手を添える・・・

ああ、もし詩が金儲けの為の道具ならどんなに楽だったろう?

もし、人が自分自身の宿命から逃れて

金と物と肉欲のこの世界に溶け込む事ができれば、どんなに楽だろう?

あらゆる複雑な哲学、物、思想を退けて、実に平板なこの世界の掟そのものと化して

そうして、毎日明朗な自己として目覚める事ができたら、どんなに楽だろうか?

ああ、僕は僕を失いたい・・・僕にとって僕は最大の重荷だ！・・・

なのに、今、こうして僕がまた何かを書いているという事は

他人にとって何でもなくとも、自分にとってやはり何かなのだという事だ

そして、自分にとって何かだという事はこの世界にとってもやはり何かなのだという事だ

世界がどんなにはしゃいでいても、それが宿命を忘れていれば

それは神の小指が紡ぎだした塵一つの価値もない・・・

だからこそ、僕は生きている事に意味を見出そうとするし

それによって懐疑論に至り、そしてカオスの海に溺死する・・・

ああ、朝日がもし暗ければ、夜の深さを永遠に味わわなくて済むのに！・・・

にも関わらずこうして僕はまた日曜の朝に

ノートパソコンを開いて、言葉を紡ぎだす

それに何の意味もない事を知っているのに

・・・だから、僕にはもう何も書く事はない

書く事がなくなった地点から書くという行為を除いては

空袋と重荷

言いたい事があれば

言うがいい　心のままに

だが、世間はそれを許さぬであろう

人々は自分達が担ぎあげている重荷を

君が一緒にかついでいない事が不満なのだ

だが、君はその重荷の中身が

空な事を指摘してやれば良い

人々は顔を真っ赤にして君を殺そうとするが

事実、彼らの持ち上げている重荷は全て

重たそうに見せた空袋に過ぎぬ

そして、君が将来背負うべきものは

外からはいかにも軽そうに見えるが極端に重い本物の重荷

その時、君こそはいかにも軽そうな軽薄な様子を保って

そして、満身の力を込めて、自身の重荷を担がねばならない

人々が空袋の重量を自慢しあっているその時にも

小鳥のように

何故、涙が出てくるのだろう

僕は今、何の理由も感情もない涙を

ひたすら流す

人生が寂しかったり寂しくなかったり

人から嫌われたり、好かれたり

夢を持ったり、誰かに幻滅したり

もうそんな事は全てとうに終わってしまった

僕には生きる喜びもなければ、死ぬ為の絶望も存在していない

なのに今この時、僕の両目から涙が溢れてくるのは何故だろうか?

この十月の庭に朝日が照っているのは

一体、何故だろうか?

・・・そして、僕は洗面台に顔を洗いに行く

そして、その前面の鏡に映った人間とは

一体、誰だろうか?

人々が失くした代償を探している時に

自分自身をどこかへと落としてしまった一人の人間とは一体、何だろうか?

・・・今、僕はふいに外へ出る

扉を押し開いて、外へと出る

外には軽い雨が降っているが、その上から陽光も照っている

午後になれば、完全に晴れになるだろう

そう思いながら、僕は近くのコンビニへと行く

そこの店員がいつものように機械染みていたとしても

やはり、僕はどこかへ行く

もう鳥籠の中を点検し尽くした

一匹の小鳥のように

大河の後で

時の中で立ち止まれば、

ふと、秋の風が吹いている

「お前には何の価値もない」と昔、言われた事がある

だが、価値とは一体何か

今この吹きすさぶ秋風に

一体、どんな「意思」や「価値」があるというのか

・・・全ては大河のように流れ去ってしまえ

国民年金と確定申告を押し流し

ナポレオンとビスマルクの偉業を押し流し

その波間にふいにラファエロとシェイクスピアの偉業をちらと見せつつ

全てはこの秋の風のように、あの大河のように

押し流されてしまえ

今、僕は一人、秋の風の中に立っている

遠い昔、僕は自分の人生を放逐してしまった

崖の上に立って、古い恋人からの手紙を投げ捨てる人のように

そんな風に、僕は僕の人生を断崖から投げ捨ててしまった

・・・だから、全てよ　流れ去ってしまえ

どんな人生の価値も意味も見せる事なく

全ては傍流と亜流に別れて流れ去ってしまえ

そうしてその後に倒木が一本残っただけだとしても

その倒木には多分、人類一つ分の価値が

残っている事だろう

時の樹木

僕は「時」が欲しい

細切れにされた時間

スマートフォンによって刻印され、タイムカードによって切り取られた時間

そんな時間はもういらない

誰もがＦＸの一分一秒の落差で

天国や地獄を見る・・・そんな時間で

世界は溢れかえっている

僕が欲しいのはそうした時間ではない

それはもっと肉体的な時間、次第に樹がゆっくりと成長していくような

そんな「時」が僕は欲しいのだ

そして、その時が一つの成就を見る時

僕という枝の先にある葉達は始めて

僕に先駆けて何億年とそこに突っ立っている

星々の美しさを

一番幸せだった時

音楽は奏で

詩は語る

誰もが沈黙を要しているが

誰もが饒舌を愛好している

誰もが批評家だが、「創作家」は一人もいない

・・・最近では、哲学者はみんな哲学研究者に還元され

科学者とは知の世界を探索する探求者ではなく

過去の理論をただひたすらなでさする存在でしか無い

あらゆる答えがウェブを通じて流れているので

人々は問いに触れる事ができない

一日三食満足に食べる事ができ、夜はぐっすりと安心して眠れるが

人は自分を「底辺」だと信じて疑わず、そして「上」に行けば幸せになると

本気で夢見ている

しかし、それは所詮、システムが僕達に見せた巨大な一つの夢にすぎない

この化物のような世界はそうやって、夢をダシにして僕達を搾取する

つまり、僕達の人生というもっともかけがえのないものを

・・・君は山頂から飛び降りてみたまえ　すると世界が

逆さに写って見えるだろう　その時、君は

自分が一番貧しかった時が一番幸福だった事を知るのだ

記憶の光景

例えば、僕達に否定する事のできない

沢山の道楽や快楽がはびこっている

誰かがアイドルになる夢、金を沢山持つ夢、有名になり、人から見られる夢

そんな夢がたくさんあって、それらはもちろん、否定すべきものではないのだが

しかし、僕達にそれ以外の夢は見当たらない

遠い昔、ニーチェが「神は死んだ」と言った時に、神は死に

それと共にあらゆる種類の理想は滅びた

そうして二つの大戦を経て僕達はやがて

自分達の生のみを一心に追い詰めるようになった

「これを持てば幸せだよ！」「これを買えば勝ち組だよ！」・・・そんな言葉が市場に響く

そんな世界に今、僕達は生きている

そこではもちろん、人間も所有物の一種で

彼女や彼氏や友人が沢山いたりすると「リア充」だと目されている

と、いうのも僕達にはあのニーチェの宣言以来、どんな理想も失われてしまったので

ひたすら、僕達の金銭欲や快楽や享楽を追求する他なくなったからだ

だから、この世界ではスポーツ選手と投資家とアイドルだけが英雄のようであり

それ以外は何となく闇に沈んでいるように見える

さて、そんな世界では僕達ーーーいかれてしまった者達は

一体、何を思えばいいのか?

そこで、僕は僕一人だけが入れる夢を作成して

それに身をすっぽりと入れて、世界から自分を隔離する事にした

そして、そこでまどろんでいる内に僕はいつの間にか

おじいさんになってしまっていたのだ

そして、目覚めると、そこに人々はもういなかった

そこには人々の影は一つもなかった

人々の享楽と幸福はやがて大きな失望と絶望を生み

そして、それが他者への攻撃へとつながり、そしてその結果、世界は滅びたのだった

だがしかし、僕は「そうか」と一つ呟いただけで

また、自分の夢の中にそっと戻った

もう世界は滅びてしまったのだから

これからは安心してあの世界の事を愛せると

そう思いながら

全て滅びてしまったので、滅びてしまったものは深く愛する事ができる

人類も同様に

だが、その時、寝入った僕の夢に出てきた光景は

人類ともあの世界とも全く関係のない

僕自身の幼い日の記憶の光景だった

バベルの塔の頂上で

僕もまた人並みに幸福になりたいのだが

僕の中の宿命がそれを許さないのだ

僕は幸福が恐ろしい

幸福になる事はいつも、次の瞬間にやってくる

深淵への落下を予測させる

だから、僕には不幸こそが似つかわしい

不幸は安心する　孤独でいると

人と離れ離れになる心配がない　他人の信頼を得続けるために

努力したり演技したりしなくて良いと思える

だが、しかし、今、この僕の書いたものを読んでいる『君』とは何か

それは僕の為に作られた一つの偶像ではないのか

僕はいつの間にか、自分に都合の良い君を創造してしまったというのか

僕の語る全ての言葉のあらゆる感情に

仔細にうなずいてくれるそのような魂を

そして、その時、ようやく、僕は孤独から解放されるというのか?

・・・今、僕が気が違っている事を確信する時

実に僕の心は穏やかで満ち足りている

まるで世界がバグってぶっ壊れたかのようだ

そして、ゆったりと月は落ちてくる

あれはコロニー落としの夜・・・そう、君が生まれた晩だ

だが、いつか君の正気は僕の狂気を

理解するはめになるだろう

何故って、君も一人の人間だから

だから、君もまたあの人間達が造り上げたバベルの塔を

再び、登りきらなければならないだろう

そして、その頂上では僕の狂気が君を待っている

君が血を吐きそうな微笑を見せて

僕に握手を求めるその日を

神への復讐

神と人間とが将棋を指せば

常に、神に一歩有利だろうか

神は常に人間の思考を読み取って

そして、その次の手を指すだろうか

すると、人間の方でもすぐにその事に感づき

それとは違う手を指そうとするだろうか

だが、そんな事で神の手は破れはしない

だが、その敗北の仕方に

人間らしさの全てが現れる

・・・ここ最近は、神になったかのような人間が多い気がする

彼らは人権・法律・弁護士・裁判・世論・メディア・多数決などを背負って

そうして正に人神の如く判断をし、他人を追い詰める事をしている

・・・僕は気がかりなのだ

いつ、神と化した彼らに

彼らの人間性そのものが

復讐するのか、という事が

明日の勝利

感受性のない人間が

この世を支配している

だが、それは多分、当然の事なのだ

世界は義務を遂行し、すでにある価値を認める者に

多大なる権利を与える

従って、パスカルやニーチェのような懐疑主義者達はいつでも

この世の厄介者にすぎない

そして、感受性の欠けた人々は時折

塔のてっぺんでニーチェやパスカルを引用してみせる

彼らをその塔のための一つの瓦礫石とするために

これまでずっと長い間、天才と凡人は闘争してきた

そして、その勝利は常に凡人ものであり、愚か者達は常に勝者であったのだ

だが、天才達にも一つだけ特権が許されていた

それは敗北する事によって自身の軌跡を社会の中にしっかりと残す事

彼らはそうやって、負ける事により自己を発現してきたのだ

勝っている人間とは何者でもない

彼らはただ、集合体にすぎない

それは黒い鳥の群れの中の一匹を見分ける事ができないようなものだ

あるいはネット上で集団意思にまぎれて、他人を攻撃している人々のよう

我らには敗北する術がある

そして、敗北こそが明日の勝利なのだ

あの日の光景

時間は縦に進んでいくが

僕はいつも平面を歩いている

世界はいつも前に進んでいくが

僕はいつも古代の賢人達と語らってばかり・・・

そして、それを用立てる方法も

僕は全然知らない

いつからか、知識とは学歴の事であり

教養とは胸についたバッジの数になった

なので、僕という存在はただの無名のフリーター

どんな意味もどんな価値もない

もし、世界が壊れれば、僕はせいせいするだろう

多分、その時、僕は始めてこの世界を愛する事ができるだろう

全てがガラクタになってしまえば

存在していたものはみな、懐かしい

とはいえ、あの日、あの子が泣いていたその光景は

今も僕の眼の奥に焼き付いているわけだが

クズ詩人の詩論

神が自然を造る時のように

詩人は芸術作品を造るべきである

彼の目にはもはや覆われているものは何一つなく

彼自身の力によって、悪も善も全て

作品を形作る為の一つの形象としなければならない

詩人が沈黙する時、彼は世界を見ている

画家がキャンバスに向うその時、彼の脳髄の中では

世界は全くこれまでと違う異次元の形に作り替えられている

そこでは全てが存在するが、現実は全く存在しない

彼ら芸術家にとって、現実や自然というのは

彼らの織物を造る為の素材に過ぎないのだ

そして、新たな世界は開かれる

そして、その新たな世界がどんな義務と道徳を負っているかは

次世代の人間が判断すべき事あり

我々、本物の芸術家が判断すべき事ではない

今、目の前に世界は繰り広げられている

その時、君の手が新たな世界を紡ぎだすとして

それを君の目ははっきり視認するとして

その時になってようやく、私達は古い世界から新しい世界へと移行する

これまでとは全く違う別の世界へと

その時、現実という木にぶら下がった

人間達に対する褒美などが一体何か

そんな事は全くどうでもいいのだ

私達が違う世界を開眼する事によって

人々が褒め称えたとしてたら、我々はそれを謙虚に受けて良いだろう

しかし、詩人の本質は常にあの海岸線の向こうになければならない

そうやって、古代の人はこれまでずっと

船を使って新たな世界に漕ぎだしてきたのだから

今、世界の喧騒から離れて、僕が一人でいる時

僕は自分の無限の孤独と、新たな世界への旅を

とても誇りに思っている

現実での僕がどんな人間からも嘲笑われるような

しょうもないクズだったとしても

神と暴虐者

神と人間との間に

かつて、どんな盟約があったのだろうか?

アカデミックなものの影に隠れていれば

全ての暴虐は正当性を持つと

人神達はこぞって結論した

昔、神に拝跪した人間達は

本物の謙譲を知っていたのだろうか?

神の似像を作り上げ、そして自身はその祭祀者となり

あらゆる暴虐を振るった専制者達を除いては

気付かなかった事

生きる事と死ぬ事の間に広がる世界

そんな世界で僕は今日も

言葉という肉体を抱いて生きている

現実においての僕は死ーーーそして、あの世の僕もやはり死ーーー

生という名の死と死という名の死と、

二つの死の間に挟まれて身動き取れず

ふだんの僕はいつも窒息死している

想像する事は常に体験より素晴らしいーーー

それはもちろんだ　結局、人間に備わった唯一の器官は

夢見る事しかないのだから

僕は君たちが造り上げたこの現実という

最低の出来の夢に手を振って別れを告げる

・・・フッ、シェイクスピアだってもう少し上手く夢を見たさ

あれから何百年も経って、僕達の見る夢はいまだに拙劣だ

映画館に行きたまえテレビをつけたまえネットの放送を見たまえ

そこにどんな拙劣な夢があるのか

そして、君のーーーいや、僕達の人生こそは

この世での最も愚鈍な夢だ

生きる事を礼賛するのをやめる時

僕達は静かに棺に横たわって夢を見る死者の群れのように

その時、始めて流星の美しさが分かる事なる

もうとうに世界は終わっていたのだ　問題はただ

僕達がそれに気付かなかっただけなのだ、という事を

私と他人

旋律が響き渡る時

時の鼓動が聞こえる

時間はいつも音もなく過ぎ去るが

それは「音」として現れざるを得ない

私には見えない無数の事が

私を取り巻いていつも私を

忘却の淵に立たせる

私がどんなに醜いか、私がどんなに美しいかを

ただ、私一人だけが知っているというのなら

他人とは一体、何なのか

それはもう一人の「私」なのだろうか

敗北する詩人

http://p.booklog.jp/book/80540

著者：ヤマダヒフミ
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/yamadahifumi/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/80540

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/80540

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ